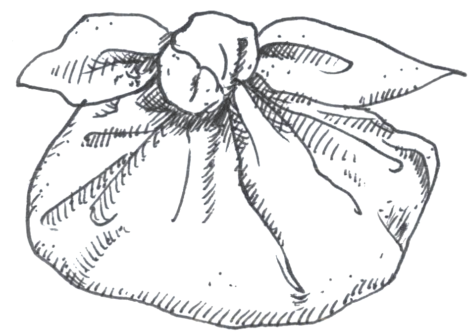


あくとたがわりやうのすけ

芥川龍之介

みかん

蜜柑



一場

◆横須賀発の上り二等客車。三等切符を持って入ってくる娘。

或曇った冬の日暮である。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はいなかった。外を覗くと、うす暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに吠え立っていた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套のポケットへじっと両手をつっこんだまま、そこにはいつている夕刊を出して見ようと云う元氣さえ起らなかった。

が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりをはじめ、待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思うと、間もなく車掌の何か云い罵る声と共に、私の乗っている二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはいつて来た、と同時に一つずしりと揺れて、徐に汽車は動き出した。一本ずつ

眼をくぎって行くプラットフォオムの柱、置き忘れたような運水車、それから車内の誰かに祝儀の礼を云っている赤帽——そう云うすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行った。私は漸くほっとした心もちになつて、巻煙草に火をつけながら、始めて懶い睡をあげて、前の席に腰を下していた小娘の顔を一瞥した。それは油気のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある鞞だらけの両頬を、氣持の悪い程赤く火照らせた、如何にも田舎者らしい娘だった。しかも垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包みがあつた。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかりと握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかつた。それから彼女の服装が不潔なものやはり不快だつた。最後にその二等と三等との区別さえも弁えない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから巻煙草に火をつけた私、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云う心もちもあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電燈の光に変わつて、刷の悪い何欄かの活字が意外な位鮮に私の眼の前へ浮んで来た。云うまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはいつたのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、

やはり私わたくしの憂鬱ゆううつを慰なぐさむべく、世間せけんは余あまりに平凡へいぼんな出来事できごとばかりで
持ち切もっていた。講和問題こうわもんだい、新婦新郎しんぶしんろう、流職事件とくしよくじけん、死亡広告しぼうこうこく――
私は隧道トンネルへはいった一瞬間いっしゆんかん、汽車きしゃの走はしっている方向ほうこうが逆ぎやくに
なったような錯覚さつかくを感じながら、それらの索漠さくぼくとした記事きじから記事きじへ
殆ほとんど機械的きかいてきに眼めを通とおした。が、その間あいだも勿論もちろんあの小娘こむすめが、あたかも
卑俗ひぞくな現実げんじつを人間にんげんにしたような面持ちおももで、私わたくしの前に坐すわっている事ことを
絶えず意識いしぎせずにはいられなかった。この隧道トンネルの中の汽車きしゃと、
この田舎者いなかものの小娘こむすめと、そうして又またこの平凡へいぼんな記事きじに埋うずまっている夕刊ゆうかんと、
――これが象徴しょうちようでなくて何なんであろう。不可解ふかかいな、下等かどうな、退屈たいくつな人生じんせいの
象徴しょうちようでなくて何なんであろう。私わたくしは一切いっさいがくだらなくなつて、
読みかけた夕刊ゆうかんを抛ほうり出すと、又窓枠またまどわくに頭あたまを靠もたせながら、死しんだように
眼めをつぶつて、うつらうつらし始はじめた。

◆「私」の横の席に来て、窓を開ける娘。

それから幾分か過ぎた後であった。ふと何かに脅されたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようとしている。が、重い硝子戸は中々思うようにあがらないらしい。あの鞆だらけの頬は愈赤くなって、時々鼻涙をすすりこむ音が、小さな息の切れる声と一しよに、せわしなく耳へはいって来る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかった。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかかろうとしている事は、暮色の中にも、枯草ばかり明い両側の山腹が、間近く窓側に迫って来たのでも、すぐに合点の行く事であった。にも関らずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下そうとする、——その理由が私には呑みこめなかった。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとか考えられなかった。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡げようとして悪戦苦闘する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るような冷酷な眼で眺めていた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうぱたりと下へ落ちた。

そうしてその四角な穴の中から、煤を溶したようなどす黒い空気が、
俄に息苦しい煙になって、濛々と車内へ漲り出した。元来
咽喉を害していた私は、手巾を顔に当てる暇さえなく、この煙を
満面に浴びせられたおかげで、殆息もつけない程咳きこまなければ
ならなかった。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ
首をのばして、闇を吹く風に 银杏返しの鬢の毛を戦がせながら、
じつと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電燈の光の中に
眺めた時、もう窓の外が見る明るくなって、そこから土の匂や
枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで来なかったなら、漸
咳きやんだ私は、この見知らない小娘を 頭ごなしに叱りつけてでも、
又元の通り 窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道を迂りぬけて、
枯草の山と山との間に挟まれた、或貧しい町はずれの踏切りに
通りかかっていた。踏切りの近くには、いずれも見すばらしい藁屋根や瓦屋根が
ごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであろう、唯一旒の
うす白い旗が懶げに暮色を揺っていた。やっと隧道を出たと思う――
その時 その蕭索とした踏切りの柵の向うに、私は 頬の赤い
三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、
この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃って背が低かった。そうして又
この町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。

それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げるが早いか、
いたいた喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊声を一生懸命に
迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた
例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢よく左右に振った
と思うと、忽ち心を躍らすばかり暖かな日の色に染まっている蜜柑が
凡そ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降って来た。
私には思わず息を呑んだ。そうして刹那に一切を了解した。
小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴こうとしている小娘は、
その懐に蔵していた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで
見送りに来た。弟たちの労に報いたのである。

三場

◆心温まる光景を見た後の「私」。

暮色を帯びた 町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた
三人の子供たちと、そうしてその上に乱落する 鮮やかな蜜柑の色と――
すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく 通り過ぎた。が、私の
心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。
そうしてそこから、或得体の知れない 朗らかな心もちが 湧き上って
来るのを意識した。私 は昂然と頭を挙げて、まるで別人を見るように
あの小娘を注視した。小娘は 何時かもう 私 の前の席に返って、
相不変 鞆だらけの頬を 萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、
大きな風呂敷包みを抱えた手に、しっかりと三等切符を握っている。……
私 は この時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そうして又
不可解な、下等な、退屈な人生を 僅に忘れる事が出来たのである。

〈完〉

語彙

一場

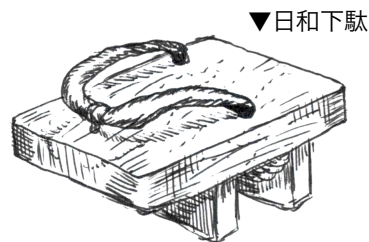
にとうきやくしや にとうしつ
二等客車・二等室：昭和35年まで、客車は一等・二等・三等の3等級に分けられていました。等級が高いほど内装やシートが豪華で余裕がありました。現代では、二等客車がグリーン車、三等客車が普通車に相当し、一等客車に当たるものは通常の列車にありません。二等客車は、大正時代中頃まで、ロングシートが主流でした。本作品の客車も、反対側の窓を開けようと、娘が主人公の横に移動していることから、ロングシートだったようです。

はっしやのみえ
発車の笛：乗客に列車が発車することを知らせるために、車掌が吹く笛です。「ピーッ」と長めに吹かれます。発車メロディーが整備されていない路線では、現代でも車

掌が笛を吹いています。また、新幹線でも笛が使われています。

がいとう
外套：西洋のオーバーコート。防寒用のアウターです。

ひよりげた
日和下駄：天気の良い日に履くのに向いた、女物の歯の薄い下駄です。関西では利休下駄とも言います。



▼日和下駄

うんすいしや
運水車：「運水車」という言葉は辞書にありませんが、使われている漢字から液体を運ぶための貨車だと思われます。明治33年に、石



▲外套

油製品を運ぶための貨車として、現在でも見るような円筒形のタンクを積んだ「油槽車」が登場しました。

しゅうぎ
祝儀：現在では結婚式などのお祝いの際に贈るお金のことを「お祝儀」と言いますが、ここではチップのことです。個人に仕事を依頼した際、感謝の気持ちとして多めに料金を渡すことがありました。礼を言っている赤帽は、祝儀をはずんでもらったのでしょうか。

あかぼう
赤帽：駅で利用客の手荷物を待合室や列車に運ぶ、ポーターです。



赤帽▲

明治時代後半に関西地方で誕生し、平成10年代まで存在していました。赤い帽子を被っていたことから、「赤帽」と呼ばれました。

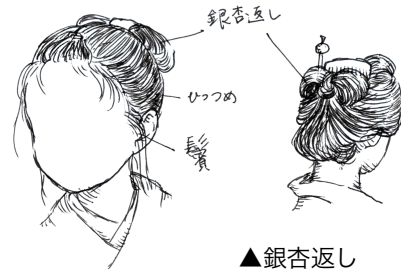
ぼいえん
煤煙：石炭を燃やした時に発生する煙です。すすが混じっていて、客車内に入り込むと、乗客の顔を真っ黒にしたり、咳き込ませたりしました。そのため、煙が入り込みやすいトンネルでは、事前に窓を閉めるのがマナーとなっていました。

まきたばこ
巻煙草：現代のいわゆるタバコと同じ、煙草を紙で巻いたものです。日本では江戸時代から煙管での喫煙が一般的でしたが、大正時代には、より手軽な紙巻煙草が広く普及しました。

ものう
懶い：通常、「物憂い」と書きます。動くのも面倒なほど気がふさいでいたり、憂鬱ゆううつだったりするよ

うすです。

油気のない髪：^{あぶらけ}ここで言う油とは、現代のヘアワックスのようなものです。結い上げた日本髪を美しく保つには、^{かみ}鬢付け油が欠かせませんが、娘はその油をつけていません。身なりと相まって、いっそうみすばらしく見えたことでしょう。



▲银杏返し

ひつめの银杏返し：^{いちようがえ}江戸時代末期から明治時代にかけて一般的に結われた女性の髪型です。髪を根元から2つに分けて先を留め、∞の形にしたものです。银杏の葉に形が似ていることから银杏返しと呼ばれました。本来は襟足や前髪をふんわりと丸くしますが、こ

こでは「ひつめの银杏返し」ですので、^{まげ}髷にしている部分以外は単に引っ張ってまとめているようです。

横なでの痕：^{よこ}「横なで」は、横になでることです。ここでは、涙や鼻水を拭いたあとか、頬を何かがかすってついた傷のこのようです。少なくとも娘の頬はきれいとは言えない状態だったようです。

萌黄色：^{もえぎいろ}黄緑色の一種で、春に萌え出る草の芽を表現した色です。

三等の赤切符：^{さんとう}昭和15年まで、^{あかきっぷ}鉄道の切符は客車の等級ごとに色分けがされていて、一等が白色、二等が青色、三等が赤色でした。

刷りの悪い何欄かの活字：^{すり}当時の新聞は、^{わる}活字という鉛の判子を用い、^{なにらん}版画と同じ原理で印刷する活版印刷の技術で印刷されていました。そのため、インクが掠れて

いることがよくありました。

講話問題：^{こうわもんだい}ちょうどこの作品が発表された大正8年、第一次世界大戦の戦後処理として、パリで講和会議が開かれました。日本は、このパリ講和会議で調印されたベルサイユ条約で中国の^{サントン}山東半島の権益をドイツから引き継ぐことが認められました。しかし、当の中国がこの条約に調印しなかったため、山東半島の扱いは、宙に浮いた状態となってしまいました。

洗職事件：^{とくしよく}「洗職」とは、公務員による職権乱用や^{しゅうわい}取賄などの汚職のことです。明治時代から大正時代にかけて、汚職がたびたび問題になりました。大正3年には海軍高官による大規模な汚職事件「シーメンス事件」が発覚し、内閣が辞職するなど大きな問題となりました。

死亡広告：^{しぼうこうこく}新聞の社会欄に有料で掲載する訃報のことです。著名人の場合は、通常の記事として扱われます。

索漠とした：^{さくぼく}心が満たされず、さびしく感じるようすです。

二場

隧道の口へさしかかる：^{トンネル}汽車がトンネルに入る前には、^{ぼいえん}煤煙が客車内に入り込むのを防ぐため、すべての窓を閉める必要がありました。

気色：^{けしき}何かが起きようとする予兆やようすです。人に使うと、気持ちの表れやそぶりのことを指します。

鬢：^{びん}耳の前から上あたりや、頭の横部分の髪です。本格的な日本髪では、ここに型を入れて髪を結い、左右に髪を張り出したように

見せることがあります。

ふみき ばん
踏切り番：踏切が自動化される以前は、手動の踏切がありました。踏切の脇には小屋があり、踏切り番が常駐していました。踏切り番は、列車が通過する際に遮断器を降ろし、安全確認の証として白い旗を大きく振りました。現代でも、踏切り番がいる踏切がわずかに残っているようです。

いちりゅう
一旒：「旒」は旗やのぼりを数える時の単位です。



▲踏切り番

しょうさく
蕭索：ものさびしいようすです。「蕭」も「索」もものさびしいようすを表す漢字です。

めじろ お
目白押し：たくさんのものが隙間なく並ぶようすです。小鳥のメジロが木に留まる時、たくさんが一箇所に留まり、ギュウギュウと押し合うことから、使われるようになりました。

どんてん
曇天：くもり空のことです。

いんざん ひざん
陰惨：暗くてむごたらしい、悲惨なようすです。

ふうぶつ
風物：目に入るながめや風景のことです。季節のようすをよく表している物事を「風物詩」といったりします。

かんせい
喊声：本来は、軍が突撃する際に気合を入れるために上げる声です。同音異義語の「喚声」は、興奮した時に大声で叫ぶ声のことで

すから、この場面では「喚声」の方が合っているかもしれません。いずれにしても「ワーッ」と大きな声を出したのでしょう。

つと：「急に」「突然に」「ふいに」という意味です。「ふと」に似た言葉です。

ほうこうさき
奉公先：奉公とは、大きな商家などに、多くは住み込みで働くことです。貧しい家の子どもが、食いぶちを減らすために、幼いうちから奉公に出されることもありました。奉公先は、奉公する先の家や店のことです。

そう
蔵する：「所蔵する」「持っている」という意味です。

いくか
幾顆：「顆」は、粒状のものや果物などを数える時の単位です。つぶつぶした粉薬を「顆粒」と言うときの「顆」です。ここでは「幾顆」なので、「いくつか」という意

味です。

三場

こうぜん
昂然：「昂」は気持ちが高ぶるようすを表します。自信に満ちて、気持ちが高ぶっているようすです。

やっぱり…主人公「私」は芥川龍之介本人?

主人公の「私」は、物語が始まった時点で既に「疲労と倦怠」を感じています。その背景となる理由の説明や回想シーンは、一切出て来ません。主人公が自分自身や世の中をつまらなく感じる基本姿勢、それはもはや、大前提として読者に共有されているようです。大正時代、いわゆる「厭世家」をテーマにした小説が流行りますが、この物語は、その走りと言えるかもしれません。

この作品は、雑誌に『私が出遇ったこと』というシリーズの『一、蜜柑』として発表されました。つまり、芥川が横須賀線で実際に体験したことを元にしてしていると考えられます。

この不機嫌な「私」は、芥川龍之介自身だと言われています。芥川は、大正5年から、横須賀海軍機関学校に、英語の教官として務めており、実際、鎌倉にある借家との往復に、横須賀発上り列車を使用していました。芥川は、作家として作品を発表しつつ教師を兼任する「不愉快な二重生活」に大変苦しんでおり、知人に対する手紙の中でも、その思いを綴っています。「作家としての収入のみで暮らせるようになりたい」「執筆活動に集中したい」という気持ちが強かったのでしょう。『蜜柑』が執筆された大正7年、ちょうど新聞が第一次世界大戦の講話問題で埋め尽くされていた頃のことでした。芥川は、教員を辞める際、「もう見なくて良い!」と喜んで、英語の教科書を燃やしたそうです。そんなに嫌だったなんて……。

映像化するなら新海誠監督!

この物語は、ほとんど、風景の描写で綴られています。曇った日暮れ、人気の無い駅、吠えている犬、風になびく白い旗、夕暮れの山並み、寂れた家並み、新聞の紙面、トンネルの暗闇、黒い煤煙……全ては、色味を失ったモノクロの世界のようです。時々ポツポツと、新聞の紙面にこぼれ落ちる電灯の灯りや、少女が巻いている萌黄色の襟巻きなど、ポイントとなる色が登場し、読者をハッとさせます。

また、この物語には、多くの音が登場します。少女が履く日和下駄の足音、パタリと落ちるガラス窓、少女が鼻をすする音、「私」の咳、少女の弟たちの喚く声……多くの音が重なりながら、ゆっくりと発車した汽車が、クライマックスの場面向けて疾走します。

それは、少女が腕を伸ばし、蜜柑が空から降り落ちる瞬間。ずっと色彩を抑えられてきたモノトーンのキャンパスに、温かな陽の色に染まった蜜柑が、鮮やかに浮かび上がります。その光景のあまりの印象深さに、「私」は少女に対する見方を変えてしまうほどです。全ては、このシーンを描くための助走だったと言っても過言ではありません。

このもの悲しさときらめく光の対比……新海誠にアニメ化してもらいたい! と思ってしまう。

ところで、主人公の「疲労と倦怠」とは、物語を通して、僅かばかりしか軽減されていないようですが、それでいいのでしょうか? という批評も、あるようですよ。

横須賀 汽車の旅

運子・鎌倉方面

神奈川県三浦半島。海岸沿いは、海と山に挟まれています。トンネルが多いよ!

田浦

トンネルあり

吉倉

トンネルあり

逸見

横須賀

吉倉公園に『蜜柑』の石碑!

汽車の旅は、電車よりも大変。トンネルでは煙が充満するから、みんな慌てて窓を閉める!

蜜柑の舞台になったのは長浦のトンネルという説がメジャーだけど「私」が眠っていた時間を考えると、田浦駅より先の沼間トンネルを抜けた運子に近い所という説もある!

横須賀は海軍の港がある駅でした。現在、港には、第一次世界大戦で使用された軍艦三笠と、東郷平八郎の像が。おいしいカレー、スカジャンなど、有名なものが沢山。米軍基地があるので、外国人も多いよ!



朗読を楽しむポイント!

- この物語には、一切セリフが出て来ません。その代わり、汽車の走るスピード感や少女の動向など、動きや音のある部分が、臨場感を表現するチャンスです。また、形容詞や副詞を読む際、少し強めに情感を込めてみて下さい。
- ただし、前半から情感たっぷりに読みすぎると、クライマックスの盛り上がりやラストの安堵感・解放感を出しづらくなってしまいますので、ペース配分に気を付けましょう。
- 「○○な○○、○○している○○、○○色の○○」など、3つの語句が連なる文章が頻りに登場します。一見長くて読みづらいと感じる文章でも、3つのかたまりを意識しておく、リズムを掴みやすくなります。

Podcast ののラジオ



好評配信中！

視聴・購読・ご感想はこちらから

<https://gekidannono.com/wp/archives/podcast>

劇団ののと読む 朗読テキスト 「蜜柑」 Podcast 配信版

発行日 2018年4月26日

著者 芥川 龍之介

編集 劇団のの

発行 劇団のの

[https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです

底本 蜘蛛の糸・杜子春

出版社 新潮社（新潮文庫）

初版 1968年11月15日

入力版 1989年5月30日

図書カード URL

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/card43017.html>

